

創造的パフォーマンス形成の支援に関する研究

Research on Support for Creative Performance.

杉山 祐子

Yuko SUGIYAMA

抄録：子どもの集団活動の指導力養成のために、保育者養成課程では集団による創造的パフォーマンス形成の体験が重要である。活動の支援方法はこれまで人的支援が中心であった。本研究では、人的支援に加え物的支援として「鏡」とタブレット端末による「録画」を提供することで、活動の過程においてどの支援が集団での創造的活動に最も効果的であるかを確認した。その結果、全体で見ると、物的支援の評価は人間的支援の評価を上回ることはなかったが、活動の中間地点では同等の評価を得た。また、活動当初、人的支援の「リーダー」の評価は他の3種類よりも非常に高く、自律的な活動が始動したことを示した。活動終了時には「コーチ」の評価のみが高くなったことは、学習目的が表現力をさらに高める活動に発展したと言える。物的支援は練習の段階で評価が高く示されことは、動きの客観的視点が重要視されていることが分かった、今後は、人的支援と物的支援の相互の活用モデルを見出し、学習者が自主的に創造活動を推進できる支援を多面的に検討していく。

キーワード：創造的パフォーマンス、保育者養成課程、自律的活動、人的支援、物的支援

I はじめに

1. 創造的パフォーマンス形成の支援方法について

保育における子どもの表現活動の場は、作品展や音楽発表会、運動会など多彩である。改定された幼稚園教育要領(文部科学省,2018)や保育者保育指針(厚生労働省,2018)では、パフォーマンス(作品)を創りあげる過程の中での仲間との協働が重要視されている。子どもの集団によるパフォーマンスでは、人的支援として保育者が指導力を発揮している。しかし、保育者は表現の専門家とは限らず、その指導力は現場での蓄積された経験によると考えられる。経験の浅い保育者であっても、子どもの集団によるパフォーマンスを指導しなければならないことから、原資としての自分自身が仲間との協働によるパフォーマンスの経験が重要である。小中学校でのダンス指導が義務化された時、体育であってもダンスが専門でない教員の不安感が報告され、学習者が“自ら気づく”ための客観的情報の提供が求められている(寺山,2007)。そこで、創造的パフォーマンス形成のための支援として、人的支援と物的支援について考えてみる。

a 人的支援

集団における創造的パフォーマンス形成のための人的支援として、チームのリーダーシップが考えられる。竹林(2004)は、今日の組織社会化において、協働意欲の向上を図るためには、チーム制作業組織が有効であり、さらにチーム内の個人の自主性・自発性を引き出すため

には、リーダーシップが重要な位置を占めていると説いている。倉藤ほか(2011)は、「指導者」のリーダーシップのタイプが運動部の選手の自主性に及ぼす影響について調査した。その結果、選手の成績と部内の関係維持のどちらも重視する指導者タイプのチームにおいて、選手が最も高い自主性を有していたと報告している。スポーツチームでのリーダーシップの成果は、創造的パフォーマンス形成のためのチームにも適応できよう。保育者養成課程の場合、「指導者」は授業担当者である。これはクラス担任の保育者と同じ立場となる。フォロワーからの視点でリーダーシップを評価することは、将来的に現場での指導者の立場になった場合の評価の指標となろう。「指導者」のリーダーシップは、作品の出来栄や進捗の予測を立て、チームワークの円滑さや諸問題を把握して、的確なタイミングでの指導や助言をすることと解釈できる。一方、村井ほか(2010)によると、リーダーシップには、集団外部発生型「リーダー」というリーダーシップと、集団内部発生型「リーダー」というリーダーシップがあると述べ、「指導者」自身がチームリーダーのリーダーシップの必要性を感じていると報告している。さらに、スポーツ集団のよりよい運営や選手育成のために、「チームリーダー」であるキャプテンの影響力を吟味する必要があるとも述べている。小野(2004)は、リーダーシップをこれまでの英雄的存在として捉えるのではなく、フォロワー側の視点から評価や分析をすることの重要性を説いている。小野(2004)は、新薬開発チー

ム内での「チームリーダー」の外部評価と「フォロワー」である研究員から見る「チームリーダー」への認識について調査した。その結果、「チームリーダー」の評価に関し、外部評価と研究員による認識が相違していることが分かった。

以上のリーダーシップ論から、本研究において人的支援であるリーダーシップを、「指導者」のリーダーシップと「チームリーダー」のリーダーシップの2種に区別して考えることにした。

b 物的支援

物的支援は、道具によるパフォーマーへの客観的情報提供の支援と考える。道具である以上、使い手の目的により活用が相違する。その一つに大型鏡の活用がある。「鏡」は演じながら自分の目で自分自身を確認できる。菅家ほか(2020)は「表現スポーツを専門とする者の多くは、練習時に「鏡」を利用し、自身の動作を確認することで技能習得、技術向上を目指していると考えられる。」と述べている。そのことは、バレエやダンスのスタジオにはパフォーマンスを確認するための「鏡」があり、自分自身で動きを逐一確認しながら練習をする姿からも裏付けられる。安藤(2009)は、演劇俳優の練習過程における演技の客観視のための「鏡」の使用について、初心者と熟達者の比較観察を行った。その結果、「鏡」の使用頻度は初心者のほうが高かったことがわかった。「初心者には、自分の演技が他者にどのように見えているのかを把握する能力が十分ではなく、それを補うために積極的に鏡を利用しようということがわかった。」と結論付けている。また、菅家ほか(2020)は、大学ダンス授業における「鏡」の利用が動作習得に及ぼす影響を、エアロビクス受講生の自己評価から検討した。ダンスの技能習得のために、ビデオ学習、教員の模範演技、「鏡」の3つ支援が用意された。学習者の自己評価から、自分自身の動きを確認するためには、「鏡」の利用は有効とは言えないが、教員の模範演技と自分自身の動きを比較する場合に有効であることが分かった。しかし、「鏡」の活用のデメリットとして、受講生の自己評価から、「全体が見えることで自分自身の動きに集中できない」といった他者の存在が視界に入ることが述べられていた。また、長澤ほか(2016)は、動作習得の手段の研究として、ダンス経験の少ない者が何を見て自身のエラーに気付き修正しようとするのかを、学習者の視線の動きから考察した。視線の対象は、ダンス指導者の模範演技の「模範VTR」、大型の「鏡」、「自分自身」の3点である。その結果、視線の動きは「模範VTR」を主とし、それに加えて大型の「鏡」の使用頻度が高い学習者が動作を早く習得した。さらに、「鏡」を見ながらの動作習得には、修正ポイントを指導者が言語指示することが効果を上げることに寄与するという可能性が示唆された。このように、「鏡」の活用と効果についての報告がされている。その結果により菅家ほか(2020)は、「鏡はその授業の

目的に応じて使い分けていくことが重要であると考えられる。」と目的をもって使い分ける必要性に言及した。また、長澤ほか(2016)は、動作習得の手段の研究として、ダンス経験の少ない者が何を見て自身のエラーに気付き修正しようとするのかを、学習者の視線の動きから考察した。視線の対象は、ダンス指導者の模範演技の模範VTR、大型鏡、自分自身の3点である。その結果、視線の動きは模範VTRを主とし、それに加えて大型鏡の使用頻度が高い学習者が動作を早く習得した。さらに、鏡を見ながらの動作習得には、修正ポイントを指導者が言語指示することで習得の効果が上がる可能性が示唆された。このように、大型鏡の活用と効果についての研究がされている。

また、物的支援として、情報機器の活用が考えられる。幼稚園教育要領(文科省, 2018)に、情報機器の活用が新たに加えられた。そこには、機器の特徴や使用方法などを考慮した上で、幼児の直接的体験を生かすことが明記されている。最近では、タブレット端末を子どもたちの観察や支援に活用している保育現場も多く見られるようになった。タブレット端末の利点は、携帯が可能でその場で即活用できる点である。しかし、保育現場ではタブレット等の情報機器活用に関して消極的な面も報告されている(堀田ほか, 2014)。情報機器は、使う目的が明確であることと便利さの実感により、保育の日常における継続と活動に貢献できると考えられる。最近では、機器の性能向上や小型化により、動きを「録画」してその場で観る活用が容易となった。さらにICT技術を駆使した多機能な動画が考案されている。新野ほか(2019)は、スポーツの反復練習における自身の姿勢を観察できるシステムとして、スマートミラーシステムを考案した。このシステムは、webカメラ・高速度カメラ・プロジェクタで構成され、スロー再生や複数回の動画の比較が可能である。スポーツやダンスにおける理想的な動作を確認するために、これまで映像再生技術改良が進められてきたが、その情報の取得方法の特殊性と高速への対応が十分ではないと、新野ほか(2019)は振り返っている。さらに、反復練習での「鏡」と「映像」の違いを被験者に問う検証も行われた。この実験は、学習者がリアルタイムに自身の動きを確認する「鏡」と、学習者の動きがその場に映し出され、重量や軸の可視化・スロー再生ができるスマートシステムの比較で行われた。実験終了後、4名の被験者に対し2つの練習法の違いを質問した結果、4名全員が「違いがある」と回答した。回答理由は「通常(鏡)の練習より目線がブレる」であった。新野(2019)は「反復練習は学習者が一人で行うことも多く、学習者が自身の姿勢を確認するために鏡を利用することも少なくない。」と述べていることから、反復練習において学習者自身の姿の客観視に「鏡」の利用の有効性が見られる。酒井(2018)は、タブレット型端末の録画再生・視聴機能を活用したボールゲームのチームプ

レーに関する実験を報告している。タブレット型端末の録画再生・視聴機能を活用する際、「ボールを持たないときの戦術的な動き」として、プレーする児童は「気づく」と「できる」をつなぐことができた、と述べている。「集団の中の自分自身」を客観視する酒井（2018）の研究は、これまでの個人に焦点を当てた研究を集団での視点に発展させた。

以上の先行研究から、保育の現場や保育者養成校の表現活動に、物的支援を導入することについて検討することは今後必要となっていくと考える。

2. 創造的パフォーマンス形成の支援の課題と目的

パフォーマンスの動作習得支援に関する先行研究に共通していたことは、自ら気づくことの重要性であった。特に初心者ほど自分自身の客観視が困難であるとの報告は、ほぼ初心者の集団である保育者養成課程の学習者にも共通すると考えられる。初心者ならではの、客観的情報収集を得られる支援が必要とされるであろう。このように、物的支援は使い手のその時々での目的による活用の変化を明らかにすることで有効的な活用が見えると考ええる。また、これまでの先行研究では、個人の自主練習での報告が主であり、複数人からなるチーム単位での活動には言及されていなかった。さらに、先行研究では動作習得用のお手本が存在し、そのお手本通りに完成度を上げることが目的とされていたため、創造性を重視したパフォーマンス形成のための支援は想定されていない。

創造的パフォーマンスを創作ダンスとする場合、その完成までの過程では、練習と話し合いの往還が続く。保育者養成課程の創作ダンスの授業における筆者の経験から、練習のみならず、チーム内の話し合いの活性化が質の高い創造的パフォーマンス形成に有効と考えてきた。しかし、前述のように、ダンスの専門的な集団ではない学習者には、意見の根拠をチームで共有することが難しく、話し合いに消極的な姿勢が垣間見られた。その解決方法は、「指導者」の助言や「リーダー」のリーダーシップという人的支援に依存していた。しかし、人的支援に加えて物的支援の活用も、話し合いの活性化のために有効活用できると推察する。そこで、本研究は集団活動による創造的パフォーマンス形成のための有効的な支援を、完成までの過程（ステップ）での変化を基に考察することを目的とする。そのために、創作ダンス形成における支援活用の評価を調査することとした。

II 方法

1. 対象者

保育者養成課程の学習者48名とした。48名はランダムに4つのチームに分けられた。各チームにおいて「リーダー」と「副リーダー」を互選した。指導者は授業担当教員の2名であった。

2. 創造ダンス形成活動の期間と場所

活動の期間は、通年で行われている『表現』の授業のうち、2019年5月10日から7月19日の7週間とした。活動の場所は体育館で、4つのチームは体育館の所定の場所を活動のエリアと決めた。創作ダンス形成活動は週1回計7回実施した。1回の活動は30分程度とした。

3. 支援の種類

支援の種類は、人的支援として「指導者」と「チームリーダー」（以降、「リーダー」）、物的支援として、可動式で大型の鏡（以降、「鏡」）と録画用タブレット型端末（以降、「録画」）の4種類とした。「指導者」は学習者に対する助言を行う。「リーダー」はチーム内の人間関係の維持や意欲の向上、話し合いの促進を計る。「鏡」は、動作習得をその場で見ながら進めることができる道具である。「録画」は、動作を動画で保存することができる。この4種の支援を選択した理由は、保育現場でも身近な支援であることと、利用や作業が容易であることによる。「鏡」は、幅80cm、高さ178.5cmの大きさで、8台準備した。学習者が使いたい時に、必要な台数を自由に使用できる環境にした。「録画」の機材として、タブレット型端末（iPad）と専用スタンドが各チーム1台配布された。

4. 使用教材

創作ダンスの曲として、子どもの歌『動物園へ行こう（海野洋司作詞 T.Paxton 作曲）』の2番と3番を使用した。

5. 創作ダンス形成活動の過程（ステップ）と内容

使用教材である『動物園へ行こう（前出）』の2番を2チーム、3番を2チームが担当し、各歌の歌詞を基にダンスの振り付けをそれぞれ創作して踊った。活動の過程（以降、ステップ）を週毎に7つに定めた。第1週の活動をステップ1、最後の7週目をステップ7と呼ぶ。各ステップの活動内容を表1に示す。各ステップの活動内容は活動開始時に指導者が伝えた。ステップ1から6までは各チーム活動、最終回のステップ7は4チーム合同のセッションとした。但し、チームにより進捗が流動的になる可能性については、各チームの「リーダー」の管理に委ねた。4種の支援は毎回提供できるように準備され、各チームや個人が必要に応じて、自由に利用することとした。

6. 支援活動の評価

支援活動の評価は、学習者に対する質問紙調査に依った。7回の活動が終了した後、2019年8月2日に学習者に対して質問紙調査を実施した。質問紙調査内容は、各ステップにおいて学習者は「一番役に立った支援」を4種の支援から選択した。この回答を4種の支援に対する学習者の評価とした。また、物的支援の「鏡」と「録画」

においては、「どんな点が役立ったか」と「活用の要望について」を自由記述による評価とした。回答は倫理的配慮に基づき、質問紙調査実施の目的と活用方法について口頭と紙面で説明し、さらに授業での成績や個人の特定に一切関係しないことを明示した。その上で回答は自己選択とした。質問紙調査は無記名とした。

表1 ステップ進行過程における創作ダンス形成活動の内容

ステップ	内容
1	【話し合い】各チームの担当歌番号を決める。その歌詞に合ったダンスのイメージのアイディアを出し合う。
2	【練習】ステップ1のアイディアを動きながら具体化し、歌詞に合わせつないでいく。
3	【話し合い・練習】つないだ動きに対し、修正点や変更を話し合いながらおおよそ完成させる。
4	【練習】全員が役割を認識し技術を上げる。ダンス全体の形を整える。
5	【話し合い・練習】最終チェックを話し合い、チームのダンスを完成させる。
6	【練習】仕上がりまで練習する
7	【合同練習】全チーム合同の発表。各チームは全体の中での最終調整をする。

Ⅲ 結果と考察

1. ステップ進行過程における学習者による人的支援と物的支援の評価

人的支援と物的支援に対して、ステップごとに評価した人数とその割合を表2に示した。まず、全ステップを通した評価については、人的支援が58.5%、物的支援が41.5%であったことから、創作ダンス形成には人的支援が重視されていた。このことは、7ステップのうち中間地点の4ステップを除く全てのステップにおいて、人的支援の評価が物的支援を上回っていることから言及できる。特に、ステップ1では人的支援が物的支援に比べ有意に高かった（5%水準）。このことは活動の始動期には人的支援が特に重視され、人との関わりが重要であることを示している。しかしステップが進行するに従い、物的支援と人的支援の評価の差が少なくなり、形成活動の中間地点であるステップ4に至り、両者の評価が同等になった。このことは、ステップ4の活動が「鏡」と「録画」による物的支援が人的支援と同等に役に立ったことを示していると考えられる。ステップ4では、それまでの3つのステップにおいては形ができてきた創作ダンスを、チームのメンバー全員が覚えて表現できるよう徹底的に練習をしている。その場合に役に立つ支援

として、人的支援に加えて物的支援の利用が増えてきたと言える。このように学習者の評価をステップ進行の過程でみると、活動開始当初は人的支援の評価が高いが、ステップが進むに従い両支援の評価の差異は縮小し、形成活動の中間地点であるステップ4での評価は両支援共に差がなくなった。しかし、さらにステップが進行すると人的支援の評価が再度高くなる結果を得た。このことから創作ダンスの形成活動は、人的支援に始まり人的支援で終わると言えるが、このことは単なる外面的な現象に過ぎないのではないだろうか。特に中間地点のステップ4以後に再び人的支援の重要性が増加することは、学習者の創作ダンス形成に関する態度に及ぼす内面的な変化を考察する必要があると考える。例えば創作ダンスの形成活動が形としてあるいはチームという集団として整えられるのがステップ4以前と見なせば、ステップ4以後ではさらに発展して学習者というメンバーが個性を生かし自分らしい活動の観点を持つ時期に到達してきたために、物的支援の限界を感じて指導者やリーダーという人的支援の必要性が増してきたとも考えられる。またチームで創作ダンスという一つの作品を創る場合は、お互いの意思疎通と相互理解が必要となる。そのためには物的支援では学習者個人の創作ダンスの形成活動には有用であっても、相互理解を高めるためには物的支援への依存ではなく人的支援の重要性を増すことが考えられる。また、人的支援を必要としていることは、創作ダンスが最終的に人からの評価を受ける作品であることにつながっていると考えられる。つまり観客の視点を意識していることとなる。ともあれ物的支援は、活動の中間地点であるステップ4の評価を頂点として、以後のステップの経過では減少傾向をたどった。この経過は極めて注目すべき点である。このことは学習者がステップ4以前は創作ダンスの形成に物的支援を活用することが役に立つと評価するとともに、その活用の範囲に気づいた結果であると考えられる。先述の、ステップ4では評価が人的支援と同等になったことの理由を明確にすることにより、中間地点以後における物的支援の新しい観点からの活用の理由が明らかになる可能性が示唆されたと言える。

表2 人的支援と物的支援に対して評価した人数とその割合 (n=42)

ステップ	人的支援	物的支援	
1	30人(71.4%)	12人(28.6%)	*
2	26 (61.9)	16 (38.1)	
3	24 (57.1)	18 (42.9)	
4	21 (50.0)	21 (50.0)	
5	22 (52.4)	20 (47.6)	
6	24 (57.1)	18 (42.9)	
7	25 (59.5)	17 (40.5)	

* p<0.05

2. ステップ進行過程における学習者の評価が高かった支援について

前述のように、人的支援は「指導者」と「リーダー」の2種、物的支援は「鏡」と「録画」の2種の計4種で構成されている。ステップごとの4種の支援に対して評価した人数とその割合を表3に示した。表に示す人数とは、各ステップで「最も役に立った」と回答された支援の選択人数である。割合は対象人数で選択人数を除いたパーセントである。表3の全ステップの総数からみると、最も評価が高かった支援は「リーダー」であった。本報告における「リーダー」はダンスの専門性が高いとは言えないにもかかわらず、チームのメンバーの信頼を得ていることが分かった。「リーダー」の評価が特に高かったのはステップ1であり、その後は徐々に評価の割合が下がっていき、ステップ4で他の3種の支援と差がなくなった。表1に示すように、ステップ1からステップ3は、創作ダンス形成活動の初動の段階である。中でも、ステップ1とステップ3は、話し合いが中心である。アイデアを出す話し合いには「リーダー」が重要な役割を果たし、メンバーの信頼を得ていたと言える。学習者の評価が2番目に高かったのが「録画」であった。スマホ世代でICTに慣れている学習者にとって、「録画」は便利なツールであったと考えられる。支援のうちの「鏡」は評価が最も低かった。その理由について2種類が考えられる。1つには、創作ダンス形成活動を集団でおこなう場合には、先行研究で明らかになった「鏡」の活用が不要であったことである。もう1つには、「鏡」の活用は日頃静止した姿を見ることはあっても動きを確認する機会が少ないことから、活用慣れしていないことや活用方法が分からなかったということである。本稿では、後者の理由を採用したい。活動を始める前に、それぞれの物的支援に関する説明や、活用法の具体例を提示が必要と考えられる。

また、ステップの進行過程に伴う各支援の活用の違いについて述べる。学習者によるステップごとの4種の支援別評価の推移を示した図1によれば、ステップ1の初動段階では、「リーダー」が最も評価が高かった。ステップ1の話し合いでの物的支援の評価は低かったが、「録画」を7名が選択したことは、先行研究に見る動作習得のための物的支援の活用に加え、話し合いにおいても客観的根拠を示す道具としての活用の可能性が見られた。このように、新しい支援の提供は、学習者のニーズを新たに発掘することもできる。ステップ2では、「リーダー」によるリーダーシップが最も評価が高かったが、他の支援の評価もステップの進行に伴い徐々に増加した。創作ダンス形成の動きが活発になると、支援の利用が多様になり、チームがそれぞれ異なる支援の利用による活動が見られるようになった。ステップ3は、ステップ2で動いてみた振り返り、創作ダンスの動きについて話し合いが行われていた。この話し合いでは、「録画」

表3 4種の支援に対して評価した人数とその割合 (n=42)

ステップ	支援	人数
1	指導者	5人(11.9%)
	リーダー	25人(59.5%)
	鏡	5人(11.9%)
	録画	7人(16.7%)
2	指導者	11 (23.8)
	リーダー	15 (35.7)
	鏡	7 (16.7)
	録画	9 (21.4)
3	指導者	10 (23.8)
	リーダー	14 (33.3)
	鏡	2 (4.8)
	録画	16 (38.1)
4	指導者	10 (23.8)
	リーダー	11 (26.2)
	鏡	10 (23.8)
	録画	11 (26.2)
5	指導者	11 (26.2)
	リーダー	11 (26.2)
	鏡	3 (7.1)
	録画	17 (40.5)
6	指導者	13 (31.0)
	リーダー	11 (26.2)
	鏡	8 (19.0)
	録画	10 (23.8)
7	指導者	16 (38.1)
	リーダー	9 (21.4)
	鏡	8 (19.0)
	録画	9 (21.4)
平均	指導者	25.9%
	リーダー	32.7%
	鏡	14.6%
	録画	26.9%

の評価が「リーダー」より上回った。この段階に至っては、話し合いも活発になり、「リーダー」一人の力で活動を牽引するのではなく、チーム一人ひとりの意見をお互いに述べ合うという積極的な話し合いに発展していた。そのためには発出された意見の客観的根拠が求められることから「録画」が評価されたと考えられる。その反面、客観的根拠として「鏡」の評価が低いことは、話し合う態勢に原因があるとも考えられる。創作ダンスの活動の修正や変更を決める場合、チームのメンバーは円座になり互いの顔を見ながら話し合いをしていた。「鏡」

の場合、チームのメンバーの視線が「鏡」に向かったの一方方向に向く状態となるために、メンバー相互の視線交流が排除される。阿部ほか(2016)では、録画用 iPad を用いた場合、みんなで覗き込んで見たり考えたりすることが可能となり、学習者はそれが楽しいと回答していると報告した。このことから、話し合いで円座になれば iPad による「録画」は便利な道具となり、有用な物的支援となった。

今回の結果の中で、特徴的であるステップ4は、4種の支援の評価がほぼ同等となった。このステップについては学習者の活動と関連付けてみていく必要がある。このころの活動では、学習者が役立ったと考える支援はそれぞれ異なることから、支援の選択肢を増やすことは望ましいことと指摘できる。「録画」が最も高い評価を得たステップ5では、創作ダンス形成の仕上げに向けて、練習と話し合いの往還が頻繁になった。自分のダンスだけではなくチーム全体のダンスのバランスに注視するようになってきたと言える。そのため、チーム全体を客観視するために「録画」の選択が多くなったとみられる。これは、「リーダー」や「指導者」による口頭での指示より、物的支援を活用し、自分たちの目で確かめ自ら気づく行動がとられていた。このステップでは創作ダンス形成のまとめの時期となり、チームの活動が受動的から能動的に変化してきたと言える。メンバー各自が主体的な態度で、自らの動きを繰り返し再生して客観視できる点から、「録画」が最も評価された。

ステップ6は創作ダンス形成の仕上げの時期となり、ステップ4同様、評価は多様であったが、「指導者」の評価が最も高くなったことは、これまでのステップの経過では初めてのことであった。これは、学習者が創作ダンスを良い状態に仕上げるために、専門性の高い「指導者」の助言を求めていたと考えられる。ステップ7の合同練習では、ステップ6よりさらに「指導者」の評価が高くなった。チームの仕上がりはこれまで促進してきたが、4チーム合同となると、「指導者」の専門性の高い見地からの助言が効果的であることは想像できる。しかしその他の3種の支援の評価もそれぞれあったことから、「指導者」一辺倒ではなく、自分や自分のチームらしい独自の情報収集をしていたことがわかった。

4種の支援に対する評価の推移を図1に示す。人的支援のうちの「リーダー」の評価が、創作ダンスの形成活動の始動期に高かったのは、「リーダー」によるリーダーシップが強く求められた結果であったが、ステップ進行に伴い低下した。このことは、「リーダー」中心のチームの活動がステップの進行過程でメンバーそれぞれの自主性が芽生え、「リーダー」の牽引の重要性が低下したことが反映されたと言える。活動が後半に入ると、創作ダンスの仕上がりに関心が向くようになったとみられる。自分たちによる創作ダンスの形成活動に限界を感じ、一層高いレベルの仕上がりを求めるために「指導者」

の支援を望むようになったと考えられる。このような形成活動の経過は、創作的活動の望ましい学習モデルであると考えたい。すなわち、「指導者」に依存せずチームのメンバーが自律的に形成活動を進め、さらに素晴らしい仕上がりになりたいという意欲がチーム内に芽生え、それを実現するために高度の専門性を有する「指導者」の支援を求めたことに示されている。ここで、別の観点からの考察も述べる。活動の始動期における自律性に視点を当てれば、「リーダー」主導の活動は評価される。しかし、「指導者」の経験的な見地として、作品の完成度を上げる視点でいえば、初動期こそ「指導者」の介入が必要ではないかという意見である。「リーダー」は専門家でないことから、より良い作品完成へのモデルや技術は、「指導者」が始動期に提供することが重要である。完成のイメージや技術を始動期で適切に対応することで、後半で自分たちによる創作ダンスの形成活動に限界を感じることも減少し、「指導者」の支援を求める度合いも変化するであろう。「指導者」の役割として、活動の過程を常に見届けながら、人的支援としての2つの適切なバランスを見届ける必要がある。

同じく、図1から物的支援を比較すると、ステップ3とステップ5に典型的な結果が示された。それは、この2つのステップに限り、「鏡」と「録画」の評価が正反対を示している。両ステップとも、「録画」の支援が高い評価を得ているが、「鏡」の支援が最も低い評価を示している。ステップ3とステップ5での「録画」の評価は「鏡」より有意に高いと言える(1%水準)。他のステップでは両者ともほぼ同じ評価であった。この2つのステップは表1に示すように、「話し合い」と「練習」の複合的活動である。そのように、いくつかの活動を同時に進める場合には、「鏡」より「録画」が便利とみられる。この結果から、物的支援の2種のそれぞれの特徴と活用方法の違いが明らかとなったと言える。

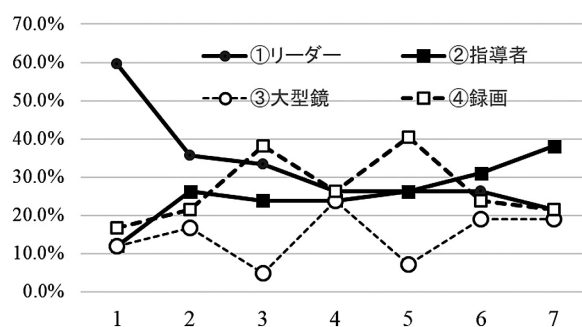


図1 4種の支援に対して評価した人数の割合(n=42)

3. 物的支援を使用したことに関する感想について

今回新しく導入した物的支援の「鏡」と「録画」の2種について、「どのような点が役立ったか」について感想を求めた。感想の文から、評価に関するキーワードを

抽出して整理した結果を表4に示した。「鏡」と「録画」共に最も多かったキーワードは“確認”であった。これは、動きが創作ダンスの主軸であり、確認したいことの解決が確認された。個人と集団というキーワードに焦点を当てると、「鏡」は“個人”が多く、「録画」では“全体”、“みんな”が見られた。前出の表3の結果の通り、「鏡」はステップ2やステップ4の個人レベルの練習が必要な段階で評価されたことと重なる。「録画」は終盤ステップで全体の動きの確認に活用されていたことから、“全体”が多いことと一致していることが確認できた。「録画」は、「鏡」には無い「後で観ることができる」機能も評価されたと考えられる。このように、学習者は2つの利点をうまく活用している様子が伺われた。しかし、「鏡」について“微妙”や“うまく映らない”の指摘もあった。今後、使い方の工夫の検討を要することが分かった。

表4 鏡と録画の評価に関する回答にみられる
キーワード (n=42 複数回答)

キーワード	鏡	録画
動きや角度、位置の確認	23	18
自分・個人	12	5
自分たち・みんな・全員	10	7
チーム	6	9
後で見られる	0	4
大きな挑戦	1	0
創作の時	1	0
微妙	1	0
上手く映らない	2	0
鏡が無い時に	0	2
表情の確認	0	1
そろえる	0	1
すごく役に立った	0	1
他者から視線	0	1
止めながら相談できる	0	1
写真と動画の使い分け	0	1
特になし	0	2
計	56	53

4. 今後の研究の展開について

学習者の評価に見られる人的支援と物的支援のステップ順の増減は、活動経過としてステップが秩序をもっていたと考えられる。特に、中間地点であるステップ4では、人的支援と物的支援がほぼ同等の評価を得ていた。今後、このステップ4でどのような活動がされていたかを正確に記録し分析することは、支援方法を考えるうえ

で重要となろう。ステップ4で多様な支援が評価されたのは、創作ダンスの精度が個人とグループ双方に求められた段階であったと考える。なぜなら、学習者はチームでの役割を果たすために個人練習が必要であったからである。その結果、自分に合った支援が多様となったと考えられる。このステップで「鏡」の評価の回答が最も高くなったのも、自分の姿をまず瞬間的にチェックする姿が頻繁に散見された。安藤（2009）が、初心者ほど自分の演技が他者にどのように見えるのかを把握することが難しく、その能力を補うために積極的に「鏡」を利用するとした結論に該当するであろう。さらにチームのメンバーは、ダンスの全体像をステップ4のころから意識し始める。チームでタブレット端末をスタンドに取り付け、「録画」しては再生を皆で観ている姿も多く見られた。このような行動特性を記録し、学習者の評価と合わせていくことで、支援の有効性がより確認できるであろう。

Ⅳ おわりに

保育現場で、子どもたちを集団として表現力を伸ばしまとめていく指導力を保育者養成課程の学びの中で仲間とともに体験することは重要である。特に創造的パフォーマンス形成は、単に手本を模倣し上達する活動とは異なる。本研究において創造的パフォーマンス形成の支援として、今回導入した物的支援の「鏡」と「録画」はステップの目的と関連して、その有効性が確認できた。しかし学習者の感想によると、扱い方を理解し十分に活用されているとは言えなかった。物的支援は、ツールとしての利便性や活用による有効性の違いを学習者に伝える機会を持つことで、一層の有効性を確保できる可能性がある。人的支援については、チームという集団のパフォーマンスには「リーダー」によるチームワークの制御は欠かせないと言える。ステップ4まで「指導者」への依存が低かったことから、初動から自律性が高くなっていると考えた。人的支援に代わる物的支援の活用は学習者の自律的行動を育む可能性が潜んでいる。しかし今回の調査は学習者による評価を調査したが、支援の活用による実際の効果や、自らの気づきによる創造的パフォーマンスの形成に有効であったかどうかまでは追及していない。今後は、支援による創造的パフォーマンス形成のための効果測定を行うことも視野に入れ、支援の活用や最適なタイミングについて、検討していく所存である。

謝 辞

今回の論文執筆にあたり、中部学院大学短期大学部非常勤講師の葛谷悦子氏には、「指導者」としての教育活動や活動の推進、及び研究への貴重な助言をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

引用文献

- 阿部学（2016）教員養成学部授業におけるアプリ教材制作および小学校での実践の試み，コンピュータ&エデュケーション，46-51.
- 安藤花恵（2009）演劇俳優における練習仮定の熟達．人工知能学会身体知研究会，SIG-SKL-05-05.
- 堀田博史，松河秀哉，奥林泰一郎，森田健宏，深見俊崇，中村恵，松山由美子，佐藤朝美（2014）タブレット端末を活用した保育での取り組み内容の調査．日本教育工学会第30回全国大会，557-558.
- 厚生労働省（2018）保育所保育指針.
- 倉藤利早，田島誠，米谷正造（2011）指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響．川崎医療福祉学会誌，20(2)，457-460.
- 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説，108.
- 長澤郁子，竹民壽郎，稲垣治之，梶山廣司（2016）ダンス授業の指導に関する一考察．人間科学研究，13，74-85.
- 新野大輔，井尻敬（2019）姿勢検出法を活用したスポーツ反復練習のためのスマートミラーシステム，エンタティメントコンピューティングシンポジウム（EC2019），138-144.
- 小野善生（2004）リーダーシップの役割分担とチーム活動活性化の関係についての考察．経営行動科学第17巻(3)，185-196.
- 酒井佑介（2018）ゴール型ゲームにおけるボールを持たないときの戦術的な動き作りの工夫．教育実践研究第28集，139-144.
- 菅家沙由梨，河野由子，金子伊樹，新井淑弘，浅井泰詞（2020）大学ダンス授業における鏡の利用が動作習得に関する自己評価に及ぼす影響．群馬大学教育実践研究，37，141-147.
- 竹林浩志（2007）リーダーシップ研究の発展と課題．大阪明浄大学紀要第4号，67-71.
- 寺山由美（2007）表現活動を指導する際の困難さについて．千葉大学教育学部研究紀要，55，1-9.

Research on Support for Creative Performance.

Yuko SUGIYAMA

Abstract : Nursery teachers are required to have the ability to organize the expressiveness of working as a team. It is especially important to have an objective view of oneself and team when engaging in creative activities. In this study, we provided “Physical support” to the existing “Human support” for Creative-Dance activities. And at each of the seven steps of activity, we conducted a survey to see which support is most effective. Looking at all steps, the evaluation of “Physical support” did not exceed the evaluation of “Human support”, however, at the mid-step, we were able to obtain it the same evaluation as “Human support”. There are two types of “Human support”: “Coach” and “Team leaders”. At the start of the activity, the evaluation of “Team leaders” was extremely higher than the other three types of support, so it can be said that the autonomous activity has started. At the end of the activity, only the evaluation of “Coach” was higher than others, so the autonomous activity developed into an activity that further enhances expressiveness. “Physical support” was highly evaluated at the step of practice. Comparing the two types of support, “ICT equipment” and “Mirrors”, “ICT equipment” was highly evaluated. The reason may be that it was convenient for objective viewing. We will continue to study the possibilities of various kinds of support so that learners can autonomously promote their creative activities.

Keywords : Creative-Dance activities, Nursery teachers training course, Autonomous activity, “Human support”, “Physical support”

